

北川鉄夫編

部落問題文芸作品選集
著作別解説事典

世界文庫版

青木貞吉

〔所収作品〕「離れ行く心」(劇・17)

〔経歴〕青木貞吉は、一九二二年早稲田大学専門部商科に在学の学生であったこと以外は不明。従つて氏名の訓みも貞吉が「テイキチ」「サダキチ」が不明、仮に本記とした

〔解説〕利根川沿いの農村、村で差別される農民で部落民の磯吉が、妻と他の男との関係を知つて妻を殺すという一幕。虐げられた部落民のやり場のない苦悩をリアルに描いている。この作品は、早大島村蔵主宰の演劇学会編「演劇学会戯曲集」第2輯(稲堂刊)所収。

曙落次

〔所収作品〕「述懐」(小説・14)
〔経歴〕曙落次の経歴は不明。この氏名は多分筆名か。

〔解説〕中国の戦地で生れ育つた土地で日本軍の使役となつて貨物を運ぶ中国人たちの惨めな姿に、強者富者が弱者貧者を支配する社会に思いを馳せる短篇。有馬頼軍主宰の同愛会機関誌「同愛」大14・8月号所載。

浅野登

〔所収作品〕「君万歳の旗の下に」(シナリオ・16)
〔経歴〕不明

〔解説〕天才音楽家白川千春の薄倖な経歴が別れた母と再会し、めでたく山本君代と結婚する物語。浅野は、この物語のシナリオ脚色者。都商會教育活動写真部で映画化。詳細は「白藤六郎」の項参照。

生田長江

いく た ちよう こう
一八八二—一九三六
鳥取県

〔所収作品〕「環境」（小説・15）「水平運動について」（評論・20）

〔経歴〕鳥取県出身。東大文学部卒。小説、戯曲、評論にわたって活躍した、社会問題に関心の深い文芸作家。「環境」は、一九二〇年「面白倶楽部」に「犯罪」の題名で連載した長篇小説。部落問題にも一定の見解をもった作家。

〔解説〕「環境」は、部落民岩井宗吉が世に出たが就職先でつぎつぎと出身の故に差別され、ついに犯罪者となって罪を重ねていく物語。この一篇の冒頭に、ある死刑囚がキリスト教に帰依しさんげ録を書いたのを友人の教戒師から作者が作品化をすすめられたと書いてあるが、このさんげ録には実在の原本があり、明治期の鈴力森お春殺し事件の犯人石井藤吉が書いた「聖徒となれる悪徒」がそれである。ただ実在の石井（小説の岩井）は部落出身でなく生地

も実際と小説とは違っている。その意味で、「環境」はフィクションであるが、内容は石井の事件を数多く採り入れている。作者がどうして小説の主人公を部落民としたかは明かでないが、部落問題の小説としては注目すべきものである。評論「水平運動について」は、全水山口県連の機関紙「防長水平」一九二四年九月号所載、糾弾などの全水の行動の必然性を肯定する長江の解放観を知りうる。

一柳齊貞岳

〔所収作品〕講談「義傑車丹波守」（ぎけつくるまたんばのかみ）

〔経歴〕講談師、その他不明

〔解説〕この講談は一柳齊貞岳の作になるものかどうかは不明。江戸の非人頭車善七（くるまぜんしち）の初代がどうして非人頭になったかという話は、江戸期に広く流布された説話があり、その内容には若

千の相違はあるが、本講談はその一つで短いが善七の士魂をえがいて面白い。本選集には「雄弁之世界」昭4・6月号所載から採った。

伊藤野枝

一八九五—一九三三
福岡県

〈所収作品〉「火つけ彦七」（小説・17）

〈経歴〉福岡県出身、大杉栄の妻で関東大震災の時、甘粕憲兵大尉らに大杉、甥宗一少年と共に殺された。無政府主義者で平塚雷鳥らの青踏社の機関誌「青踏」の編集に携わり婦人解放につくした。

〈解説〉「火つけ彦七」は、「解放」特別号に所載の小説で、部落民彦七がひどい差別をうけ、村を脱出したが、彼は差別への復讐にいたるところで放火して廻るという物語で、原作は全国水平社機関誌の「水平」に転載された。

伊東茂光

一八八六—一九六六
鹿児島県

〈所収作品〉「東七条 憎むべき差別」（随想・42）

〈経歴〉鹿児島県出身、京大法科卒、京都で教員となり校下に部落のある東七条の崇仁小学校長として同和教育の開拓につくした先駆的な教育者。「同和教育三十年」は、その自伝。

〈解説〉随想集「京とところどころ」中の一篇「東七条」。東七条の実情をえがいて差別の不当を訴える随想。

井の口明

一九〇六—
岐阜県

〈所収作品〉「暁を待つ」（小説・14）

〈経歴〉水平運動家北原泰作の筆名

〈解説〉幕末の動乱の中で、武士沢田主水と浅草弾

女は水死する。

岩野泡鳴

いわのほうめい
一八七三—一九二〇
兵庫県

左衛門の娘お霜の身分違いの悲劇、主水の出世による裏切りを糾弾するお霜の幼な馴味真太郎と主水の親友木場。やがて新しい時代の来るのを期待して。中央融和事業協会の機関誌「融和事業研究」第12—14輯に連載された時代小説。

いろは庵

あん
一八七一—一九二一
高知県

〈所収作品〉「おこそ頭巾」(小説・30)

〈経歴〉いろは庵は無政府共產主義者幸徳秋水の筆名。この小説は、秋水が一八九三年中江兆民に師事した当時、「自由新聞」にいろは庵の名で書いた新聞連載小説で、秋水は小使い稼ぎに小泉三申と交替で小説を書いたという。

〈解説〉部落民の藤田莊吉が出身を知らず、咲子と結婚しようとするが、おこそ頭巾を被る不思議な女が莊吉を他人とまちがえてつきまとい、莊吉は出身を知るが、新平民何の恥ずる者ぞと自覚。不思議な

〈所収作品〉「毒薬を飲む女」(小説・8)「部落の娘」(小説・8)「斧の福松」(劇・8)「新平民部落」(評論・20)

〈経歴〉岩野泡鳴は瀬戸内海の淡路島の出身。泡鳴は少年時、地元で土着の土族系と旧江戸直参系の対立から、直参系の少年としてひどい差別をうけ、

「えつからねえのえ多小僧」と、部落民でない泡鳴を罵る言葉に「部落差別」の蔑視語を浴びせられるという体験をもった。その体験から二十才台に滋賀県大津での教員生活の間に県下の部落と接する機会をもった。その体験が、彼に所収作品のような小説、劇を創作させた。

〈解説〉泡鳴は少年時の体験や若いときの経験から部落問題にいささか関心を示した作家である。彼は

「部落の娘」のように部落民を異種の日本人と考えたり、「斧の福松」のように部落民を脱獄名人にしたてたりして、部落民を正しく認識していないが、しかし部落民のおかれた差別状況には同情的な立場から異種観や非行者をかりて、その底に秘められた悲しみと怒りを描こうとした。こうした考え方は明治・大正期という歴史限界を考えれば、多くの日本人の部落観としては平均的なものであった。そういう限界を知って泡鳴作品は読まれるとよい。

宇野浩二

一八九一—一九六一
福岡県

〈所収作品〉「因縁事」（小説・39）「屋根裏の恋人」（小説・39）

〈経歴〉初期の「子を貸し屋」などから「山恋い」などを独特の説話体の文章でえがいた大正・昭和前期を代表する作家の一人である。そのヒューマナ作風は戦後の政治謀略事件であった「松川事件」に

対して朋友広津和郎と共に「世にも不思議な物語」を書いて、世人に正義を訴えたところに面目を示している。本名格次郎

〈解説〉「因縁事」は中央公論・大正9年5月号、「屋根裏の恋人」は改造・大正11年1月号に所載された。いずれも大正期の、宇野としては初期作品に属している。両作とも、部落の女が男性との関係で一般の女とは違った悲しみの中に差別の与える打撃をうけとめなやむのである。それはまことにいろいろな姿である。いずれも全国水平社が結成される直前の作品で、まだ差別の不当を告発し、これからの解放を自覚し、自主的に闘う思想の世に問われる以前の部落民の悲しい人間像である。

大泉黒石

おおいずみ こく せき
一八九三—一九五七
長崎県

〈所収作品〉「予言」（小説・13）「妙な狂人」（随想・20）「俺の自叙伝」（小説・43）

〔経歴〕 本名清 彼は、大正期に突如として登場した異色の文学者である。彼の母は、ロシア人外交官と結婚。日本人とロシア人が結ばれた点では

数少ない女性で、日口混血児という環境が黒石の文学の独特の作品を生む条件となった。母は早く死し、黒石は早くから父の許でロシア人の中に混つて育つたのであり、ロシア革命でロシアを離れてフランスに移り青年期に帰国して日本の学校で学び、やがて作家として世に出てゆくのである。内外にわたる博識と独特の発想で宇宙的構想をもつ小説を発表したが当時の文壇主流から疎外され第一線から退いた。部落問題には青年期の体験から関心をもち、「予言」は彼の宇宙性との体験とが合致して生まれた代表作である。

〔解説〕小説「予言」は関東大震災の翌大正十三年に「大宇宙の黙示」の題名で新光社刊、のち大正十五年「予言」と改題、酒井雄文堂から再刊、本集ではこれに拠った。「妙な狂人」は大正十五年に「野依雑誌」に所載、同誌は発禁となったので今日では入手の難しい作。「俺の自叙伝」は「中央公論」に

大正八年連載した前半部分で、浅草時代は「俺の穢多時代」の名で発表されたのが、のち単行本として刊行されたとき「俺の労働者時代」と改題された。黒石は日口混血児として幼時から差別をうけ、浅草時代には部落民と交わる中で、二つの差別を自から体験したことで独自の文学を生んだといえる。

大倉桃郎

おおくら とうろう
一八七九—一九四四
香川県

〔所収作品〕「琵琶歌」（小説前篇・23）（小説後篇・24）

〔経歴〕大倉桃郎は本名国松、香川県出身。「琵琶歌」前篇が明治三十七年大阪朝日新聞の懸賞当選として発表された時は、黒風白雨桜主人の名であった。翌明治三十八年に朝日新聞で連載されると世評高く、大倉の文学者としての出発となった。後篇は、前篇の好評をうけて新たに書かれた。大倉は、その数多くの大衆文学、児童読物を書いて大衆文学界に位

置を占めた。

〈解説〉大阪朝日の懸賞当選小説「琵琶歌」は、いくつかのエピソードをもっている。この小説の当選が発表された時、作者大倉は日露戦争に従軍し大陸で戦っていて、この発表を知らなかった。新聞社では当選者が名乗って出ないので困っていたが、たまたま読売新聞紙に剣南氏が「警露集」の一文を載せ、その文中で作者の判らぬ懸賞小説として「琵琶歌」にふれているのを、大倉の友人磯村静がこれを見て朝日新聞に伝えたので、始めて作者が判明したという経緯がある。友人は朝日新聞を見ていないので、出征に当って大倉から懸賞発表のことを委託されながら知らずにおり、剣南氏の文章を読んで驚いて朝日新聞に伝えめでたく世に出たのである。明治三十年代は、本集所収の露亭（黒法師）「想夫憐」、藤村「破戒」と並んで当時の部落問題文学を代表する作として知られ、軍国主義に差別からの解放を夢みて、その空しさが描かれる貴重な作品。

大村嘉代子

おおむらかよこ
一八八五—?
東京都

〈所収作品〉「渡り初め」（戯曲・49）

〈経歴〉女子大出身。旧姓木野村。岡本綺堂門下。

〈解説〉大正十三年九月、新报社刊「たそがれ集」所収。

岡田播陽

おかだばんよう
〈所収作品〉「聖典の栞」（小説・14）

〈経歴〉不明

〈解説〉有馬頼軍主宰の「同愛」誌・大正十五年四月号所載の時代短篇小説。大塩平八郎と大阪渡辺村の部落民との開明的な出会いをえがく。

小川未明

おがわ みめい
一八八二—一九六一
新潟県

〈所収作品〉「靴屋の主人」（小説・39）

〈経歴〉小川未明は本名健作、新潟県出身。社会主義的な傾向をもったヒューマンな作家として知られる。後年は童話作家として多くのすぐれた作品をのこす。

〈解説〉市井の小さな靴屋の主人の苦しみと怒りをえがいたヒューマンな作品。洋装が普及し、靴直しが職業として登場してくる大正期の貧しい部落民の「金権」にひしがれる惨めな心情を描いた好短篇。

小栗風葉

おぐり ふうよう
一八七五—一九二六
愛知県

〈所収作品〉「寝白粉」（ねおしろい・小説・1）

〈経歴〉小栗風葉は本名加藤磯夫、愛知県出身。尾

崎紅葉門下の逸才として知られた。「寝白粉」は彼が新進作家として台頭した時期に書かれた。小栗は旧姓

〈解説〉「寝白粉」は、明治二九年「文芸倶楽部」

九月号に載ったが、同号はこの小説のために発禁となった。それは近親相姦が風俗を乱すという理由によっている。明治初期に部落問題を現実の差別状況の中で描いた近代文学として、前後して書かれた徳田秋声「藪かうじ」と共に、先駆的な意味をもっている。

大庭柯公

おおば こうこう
兵庫県
一九二三

〈所収作品〉「所謂特殊部落」（評論・42）

〈経歴〉大庭柯公は本名景秋。若くして仮名垣魯文の門に入り、のちジャーナリストとして明治後期から大正期に東京朝日、読売新聞の代表的な記者として知られ、第一次世界大戦のときロシアへ急派され

て大戦通信を送り、以来当時の数少ないロシア通として知られ、大正十二年革命後のソ連に読売から派遣されたが、同年十二月オムスク滞在を最後に消息を絶った。革命期の状況から肅清されたとみられるが、柯公は民主的な新聞記者として評価されるべき人である。

〔解説〕大庭の部落問題を論じた唯一の評論。大庭は部落種族説によつて立論しているが、これは当時の部落問題思想の限界を示したもので、大庭のみの誤りではない。本文は柯公の評論集「世に拗ねて」（大八・止善堂書店）所収に拠った。

おきの いわ さぶ ろう 沖野岩三郎

一八七六—一九六八
和歌山県

〔所収作品〕「心の眼が開いていれば」（随想・20）
〔経歴〕和歌山県出身のキリスト者。和歌山県新宮の「大逆事件」で処刑された大石誠之助らの影響をうけて社会主義的傾向をもった小説家。「煉瓦の雨」

は大逆事件に関連した内容をもつ作品として知られる。「人類愛」第四集所載。

〔解説〕随想「心の眼が開いていれば」は掲載紙不明。「穰れ」に関連した開明的な思想をのぞかせた小文。

おか もと わたる 岡本 弥

一八七六—一九五五
和歌山県

〔所収作品〕「洞村について」（随想・20）

〔経歴〕和歌山県の高野山麓の旧端場（はば）村の出身。同村の村長をつとめ、明治末期から部落改善運動に傾倒した一人。著書も多い。

〔解説〕この随想は「融和事業研究」誌昭和十五年四七輯所載に拠ったが、本文中にある如く元来は昭和十五年正月七日から三日間にわたって和歌山日日新聞に連載。洞村は奈良県の現在橿原神宮が創建された時、同地にあった未解放部落で転地させられた洞部落の考証随想である。岡本は民俗研究に強い関

心をもち調査研究を重ねているが、これもその一つである。

神近市子

かみ ちか いち こ
一八八八—
長崎県

〈所収作品〉「アイデアリストの死」(小説・40)

「村の反逆者」(小説・50)

〈経歴〉若くして青踏社の婦人解放運動に関係、アナキズムに近づき大杉栄との恋愛で大杉を刺した日蔭茶屋事件で入獄、のち文筆活動をつづけ、本選集所収の二作はその間のものである。戦後、左派社会党から国会へ出、一九六九年八一才まで議員生活。〈解説〉「アイデアリストの死」は大正十二年「解放」別冊所載、融和主義者の偽善性をあばいた部落問題文芸として重要な内容の小説。「村の反逆者」は「改造」大正八年十二月号所載。神近の二作品は、戦前部落問題をもっとも正しく認識したものとして重視される。

川島米治

かわ しま よね じ
群馬県

〈所収作品〉「呪はれた女の運命」(記録小説・14)

〈経歴〉群馬県出身の部落解放運動家。全国水平社結成で大正十三年群馬県水平社誕生とともに参加、のち次第に融和主義的傾向に陥り、全水を離れ別派となる。

〈解説〉全国水平社機関誌「水平」第2号所載、その時の署名はSH生で平野小剣の筆名とみられたが、のち全関東水平社聯盟刊「人類愛」に転載されたとし川島米治の署名となる。作品は未完に終わった事実の小説化されたもの。

川合 仁

かわ い やすし
一九〇〇—一九六三
山梨県

〈所収作品〉「屠殺場見物」(小説・50)

〔経歴〕 山梨県出身。壺井繁治らと交わる。
〔解説〕 「文化運動」 大正14年1月号所載。

河竹黙阿弥

かわ たけ もく あ み
一八一六—一九三
東京（江戸）

〔所収作品〕 「夢結蝶鳥追」（歌舞伎劇・29）「黄門記」（歌舞伎劇・45・46）「お静礼三」（歌舞伎劇・49）

〔経歴〕 河竹黙阿弥は本名吉村新七。江戸日本橋に生れ一八三五年市村産で狂言作者見習となり、幕末から明治前期にかけて、歌舞伎作者の第一人者として、数多くの作をのこしている。

〔解説〕 「夢結蝶鳥追」（ゆめむすぶちようはとりおい）は「雪駄（せつた）直し長五郎」の名でも呼ばれる、武士と非人の身分違いが生んだ「おこよ源三郎」の話を書いた劇。別名の「雪駄直し長五郎」は、この劇で主人公となる非人の「雪駄」（ぞうりの事）直し長五郎に拠っている。一八五六（安政三）年作。「黄門記」（こうもんき）の正確な題

名は「黄門記童幼講釈」（こうもんきおさなこうしやく）で、一八七七（明治一〇）年の作。黄門は水戸光圀（みとみつくに）のこと、中心の話は藤井紋太夫の反逆を黄門が処罰する事件だがそれに関連してお犬様將軍綱吉の犬の溺愛に誤って犬を殺した善良な魚屋久五郎が罪に問われる副筋があり、それに賤民日勤進（ひかんじん）の差別される話が点景としてえがかれ、江戸期の身分制のひどさを示している。「お静礼三」（おしづれいざ）は、非人の娘お静と商家の手代礼三の身分違いの悲恋を描いた劇。雪の日のお静母娘と礼三の別れは涙を誘う一場。

河内銀二郎

かわ ち ぎん じ ろう
〔所収作品〕 「涙の物語」（小説・50）

〔経歴〕 不明

〔解説〕 「涙の物語」は、素材が事実話かどうかは不明だが、いわゆる中間説物の形式で載せられた作

品である。「改造」 大正八年七月号所載。これと同じ境遇を題材にしたものが多い。

貴^き司^し山^{やま}治^じ

一八九九—一九七三
徳島県

〈所収作品〉「記念碑」（小説・39）

〈経歴〉本名伊藤好市。プロレタリア文学「ゴー・ストッブ」などで大衆的な声価をえた作家。

〈解説〉小説「記念碑」は「改造」昭和五年十一月号に発表のプロレタリア小説。滋賀県の未解放部落の農民が暗殺された指導者浜本千蔵の記念碑を、げしい官憲の弾圧に耐えて建設する物語。この浜本は、暗殺された革新代議士山本宣治がモデルで、記念碑建設斗争の話は、滋賀県でなく、長野県の実在の話で、それを素材にした小説。

錦^{きん}城^{じょう}亭^{てい}貞^{てい}玉^{ぎょく}

〈所収作品〉「仇討・鳥追お玉」（講談・25・26）

〈経歴〉貞玉の正確な経歴は不明。「錦城亭」の名は、貞山派の祖の初代典山が「錦城亭」で、貞玉もその系譜に属する明治期の釈師。「仇討」ものが得意。

〈解説〉士族出の非人で鳥追の女太夫お玉が、浅草雷門で仇を討つまでの転変の物語。序にある如く、この講談は貞玉師の創作で、明治三四年八月一日付で速記本として大川屋書店から刊行された。江戸期の非人生活が随所にえがかれているのが注目される。

楠^{くす}本^{もと}寛^{ひろし}

〈所収作品〉「部落問題文芸の提唱」（評論・20）

〔経歴〕有馬頼寧主宰の民間融和団体「同愛会」の有力な会員で、文芸にも関心深く、詩・評論などの作品があり、同愛会解散では有馬のあつせんした農民文学懇話会の運営に与つたが、若くして逝つた。

〔楠本寛遺稿集〕あり。

〔解説〕この評論は「同愛」誌

く ぼ た ひこ さく 久保田彦作

一八四六—一九八
東京（江戸）

〔所収作品〕「鳥追阿松海上新話」（小説・30）

〔経歴〕彦作は本名村岡幸次。河竹黙阿弥門下で竹柴幸次の名で狂言作者。歌舞伎劇の他、江戸流の戯作小説を書く。

〔解説〕「鳥追阿松海上新話」（とりおいおまつか

いじようしんわ）は、明治十一年一月錦栄堂より草

双紙形式の三冊絵入本で刊行。当初、いわゆる明治

期の毒婦ものとして、鳥追いお松の変転を、「仮名

読（かなよみ）新聞」に明治十年十二月から翌年一

月に連載、好評ですぐ単行本となった。明治初期の毒婦ものの代表作の一つ。

く に えだ かん じ 邦枝完二

一八九二—一九五六
東京都

〔所収作品〕「首斬浅右衛門」（小説・47）

〔経歴〕本名莞爾。帝劇を経て大衆作家として知られる。

〔解説〕本集の「首斬浅右衛門」は、最後の山田浅右衛門兄弟をえがいたもの。

く り す ひち ろう 栗須七郎

一八八二—一九五〇
和歌山県

〔所収作品〕「水平の行者」「山麓の一悲劇」「沖

野々差別事件」（自伝記録・20）「水平審判の日」

（自伝記録・42）

〔経歴〕和歌山県本宮苔の未解放部落に生まれ、大正十一年全国水平社結成とともに解放運動に参加、独特の精神主義的な姿勢をもち「行者」といわれた運動家。自伝の「水平道」「水平審判の日」「水平の行者」の著あり。

〔解説〕「水平の行者」及び「水平審判の日」はともに自伝。他の二小篇は運動の記録。

黒くろ法ぼう師し

一八六四—一九二六
愛知県

〔所収作品〕「想夫憐」（小説・4）

〔経歴〕渡辺霞亭の別号。同参照。

〔解説〕明治三七年、大阪朝日新聞紙上に連載され、読者から熱狂的に支持を受けた、部落問題小説の中の屈指の長篇。融和的な内容で、大衆的な家庭小説らしく、転変する筋の変化で読ませる形式は、明治期の通俗小説の典型である。劇、映画にもなった。

「想夫憐」の題名は、「平家物語」の小督が琴を弾

じて夫を恋うという故事に拠る。

くりす生せい

〔所収作品〕「雪融け道」（小説・14）

〔経歴〕くりす生は西光万吉（同項参照）の別名。

くりすという字音から栗須七郎が作者と考えられていたが、西光作品。

〔解説〕全国水平社機関誌「水平」第2号所載。

幸こう堂どう得とく知ち

一八四三—一九一三
東京（江戸）

〔所収作品〕「穢多の大望」（小説・30）

〔経歴〕本名鈴木利平、江戸下谷の生れ。明治初期の戯作風な小説が得意で、また劇評家。近代小説が起るとともに名を没していった。

〔解説〕「新小説」明治三三年第6巻所載。

こて がわ ちゆうすけ
古手川忠助

大分県

〔所収作品〕「水平」（小説・6）

〔経歴〕大分県津久見市出身。古手川家は津久見の素封家で、戦後、二期にわたり津久見市市長をつとめた。

〔解説〕「水平」は全国水平社創立の翌大正十二年東京二松堂書店から単行本として刊行された。しかし、その作者古手川忠助のことは長く不明であったが、たまたま本選集で「水平」が復刻されたのが機縁で津久見市民が著者名から古手川家に知らせてようやく作者が判明、五十余年で作者の謎が解けたが、作者はすでに死去し復刻を知らなかった。

さい こう まん きち
西光万吉

一八五五—一九七〇
奈良県

〔所収作品〕「恋と戦」（シナリオ・16）「浄火」

（劇・17）「修羅変相」（劇・44）「ビルリ王」

（劇・44）

〔経歴〕西光万吉は本名清原一隆、くるす生は別名（同項参照）。奈良県御所市柏原の西光寺に生れる。一九二二年阪本清一郎らと水平社結成の提唱者となり、創立大会に「宣言」を執筆。終生部落民の解放につとめ、戦後は独特の平和運動「和栄政策」を提唱。画家として画業に従う傍ら戯曲、シナリオなどを書く。

〔解説〕「恋と戦」は遺稿としてのこされたものの初刊行。「浄火」「ビルリ王」は大正十二年の作、中外出版社より単行本「浄火」として両作を納め刊行。「修羅変相」は大正十五年、「同愛」五周年記念号所載。「浄火」は西光の代表戯曲。西光の筆名は生まれた寺の名に因む。死后「西光万吉著作集」

三巻が編まれたが「恋と戦」「修羅変相」は未収。

佐々木味津三

一八九六—

—一九三四

愛知県

〔所収作品〕「風雲天満双紙」(小説・33・34)

〔経歴〕大衆文学作家として「旗本退屈男」「右門

捕物帖」などで多くの読者をもつ。

〔解説〕「風雲天満双紙」は大塩平八郎の反乱をえがいた作者初期の代表作。「キング」誌に昭和四年五月から翌年八月まで連載、完結と共に講談社は作者に感謝と賞をかねて記念品を贈った。

真田俊子

さなだとしこ

〔所収作品〕「或る女のプロフィール」(小説・14)

〔経歴〕不明

〔解説〕中央融和事業協会「融和事業研究」第20、21集所載。

坂市

さかいち

巖

いわお 一九一九—

大阪市

〔所収作品〕「育ち行く雑草」(小説・27・28)

〔部落の母』(小説・28)

〔経歴〕大阪の大きな未解放部落西浜に生れ、靴工となつたが、たまたま勧められて自伝的な小説「泥のなかの絹靴」を「部落」誌に十二回連載、のち改訂増補して「育ち行く雑草」として同人雑誌「文学大阪」に連載。現在、右腕を病んで堺市耳原病院で長く斗病生活を送っている。

〔解説〕「育ち行く雑草」は、西浜を舞台に戦時下の部落の青年の苦斗を描いたもの。「部落の母」は、作者の親たちの生活を描いた大正期の未解放部落のリアリズム。部落出身の数少ない作家として、病ん